

インタビュー： 阿部 淳一先生（当時 仙台市立荒浜小学校 教諭）

学校としての仙台市立荒浜小学校は、震災後学区の児童が大幅に減少したことから、隣の七郷小学校と統合し、2016年3月をもって閉校となりました。しかし、校舎が震災遺構として2017年4月に公開されて以後も、地域の方々の「母校」として集う場所でもあり、防災教育にもたらす効果を含め、現在も「学校であった場所」であることが大きな意味をもっています。

今回は、震災当時、荒浜小学校の5年生の学級担任でいらっしゃった阿部淳一先生（現在：仙台市立高森小学校校長）に、当時のことと、東日本大震災から9年が経過した今、これらに向けてお考えになっていることなど、インタビューさせていただきました。

インタビュアー：大林 要介（宮城教育大学教職大学院 院生／仙台市若林区出身）

震災当時の荒浜小学校のことについて、お聞かせください。

阿部：あの時のことは忘れられません。私は5年1組の担任でしたが、帰りの会の途中で、クラスの子もたちは全員座っていました。地震があって、すぐ止むだろうと思ったらなかなか止まず、4階ということもあって、子どもたちは非常に怖がっていました。泣き始める子もいました。私も揺れを感じながら、すごく震度が大きかったので校舎が壊れないかと心配でしたが、地震の少し前に耐震工事を行っており、その点はすごく助けられました。

約3分揺れが続く間、子どもたちを落ち着かせることを第一に動きました。「机の中に潜っていれば大丈夫だから」と何回も言いましたが、それでも揺れは大きく、ロッカーの中のものも飛び出すし、机の上はぐちゃぐちゃになるし、水槽の水は溢れるし…。地震が止んでから「これは尋常でない」と思い、子どもたちを家に帰さない方がいいと判断しました。

その後指示があり、児童は校舎の4階に避難することになります。津波を想定した避難訓練をこれまでやっていたので、1～3年生は5年生の教室に、4～6年生は6年生の教室に避難させました。こちらに来た保護者の方々や先生方と「普通じゃないよね」と話をしていた、町内会の方もどんどん学校に来ました。

児童の引き渡しを名簿でチェックしましたが、これは結構スムーズに進み、津波が来る前に全員確認できました。何人かは津波が来る前の15時半頃に家に帰ったが、帰る子もいれば残る子もいて、クラスがバラバラになりました。引き渡した後の責任は保護者となるが、それでい

いのか…と考えていました。家庭の事情で帰った子、みんなと一緒にずっといた子もいたし…正しい情報が欲しかったなと思います。

用水路の逆流を見た教頭先生からは、緊迫した指示がありました。校長先生や教頭先生の指示で避難できたし、引き渡しもできたし、ここまでは順調でした。しかし、津波がいざ来ると思ったより大きく、恐ろしさを抱きました。4階でもだめだ、屋上に行こうと教頭の指示。でも屋上は寒くて、子どもたちも寒さによく耐えていました。

ただ、「いざとなったら4階に集まる」というのがあったから、4階に集まって指示が通りやすかったのです。情報・指示連絡・組織としてどう動くか、そういう意味で様々な状況を想定した避難訓練が大切だと感じました。地震や火災の想定はどこの学校でも行いますが、台風や崖崩れなどはあまりやらないですし、各地域で想定される災害に対する訓練が必要だと思います。そういう意味では、荒浜小は津波を想定した避難訓練もしっかりしていて、みんな4階に集めることができたから、その後もすぐ屋上に避難できたのだと思っています。

学校としての荒浜小は、地域の方々にとってどんな存在だったのでしょうか。

阿部：私もいろんな学校に勤務していましたが、一番地域の方に来校して頂いた学校だと感じています。毎日のように、放課後には将棋、囲碁、卓球などのボランティアの方が、自分たちから買ってやってくれました。地域の人たちにとっても非常に大切な学校であって、子どもたちと一緒にいろんなことに関われるし、子どもたちもいろんなことを教わり楽しい時間を過ごせる。地域と学校との距離は近い学校だったと思います。地域の方々にとっても「自分たちの学校」という愛着があり、大切にしたいという想いがあったからこそ、子どもは地域の宝で、みんな優しかったです。

特に、地域の方と教頭先生との関わりが、家や顔・名前を知っているくらいすごく太かった。それが学校と地域を近くするきっかけになっていました。地域の方も歓迎してくれて、学校の先生に対しても感謝の気持ちを持って接してくれました。私は担任だったけれど、身内のような感覚でした。

震災遺構としての荒浜小についてどのような思いを抱かれていますか。

阿部：震災遺構になったことは東日本大震災を伝える上で重要な意義があると思います。写真や話だけでは伝わらない自然の威力や避難の大切さ、「自分だったらこうする」と、臨場感のある心境を考える場にもなります。これらを改めて考えることのできる震災遺構荒浜小を、

教育現場でできる限り活用を進めていく必要があると思います。一方で、震災遺構を見たくない方もいらして、その方にとってはつらいでしょうから、いろんな想いを伝えつつ、語り継がなければならない。防災を勉強するためには非常に大事な場所になると考えています。

当時の体験を語れる教員は今後少なくなっていくことが考えられます。阿部先生はその後、荒浜小から離れた後も、指導主事や校長として多面に渡ってご尽力されていたと思います。当事者として、今後の関わり方について、どのようにお考えでしょうか。

阿部：学校にいる間は、研修の機会などで先生方に対して私の経験を伝えていきたい。その後は、まだしっかりとは決まっていないですが、引き続き語り継がなければならないと思っています。今は震災遺構荒浜小にいるスタッフの方々に語り部をやって頂いていますが、それとはまた別の形で、例えば他地域の方々に対しても写真などを使って語り継がなければならないと考えています。「その地域で起こり得る災害って何でしょうね」と語りかけるだけでもいい、そこから地震や津波だけでなく、災害について考えるきっかけになってくれればと思います。

では最後に、未来世代に向けて防災教育が今後どのように展開されてほしいとお考えでしょうか。展望や期待などがありましたらお聞かせください。

阿部：AI の開発・向上が進んでいて、実績に基づく予想はできますが、自然災害は必ずしもそうではありません。予想もしないことが起こるのが自然災害の恐ろしさだと考えます。ただ火事と地震だけ対策していればよいものではありません。

経験した人たちが少なくなるにつれて、未来にどう残したら良いかや、子どもたちにどう伝えていくかをより一層考えていく必要があります。その方法として震災遺構を活用したり、1つ1つの家族や地域など、コミュニティの防災意識を高めたりすることが大事です。家族の中のコミュニケーションももちろん大事ですが、学校の役割として、副読本の活用や震災遺構の活用がないと、防災意識が低くなってしまいます。家でもやらない、町内会でもやらない、学校でもやらないとなると…。だからこそ、内容を吟味した学校での防災教育を展開していく必要があります。そういう意味でも、荒浜小活用の手引きはとても意義があると考えます。多忙な現場の教員に対して、使いやすく紹介することで、いろんな先生に実践していただけるのではないかと思います。

取材日：2020年3月10日